乙

内務省 卅五年十二月十七日受 決判 十二月廿日 文書課長 閲了 施行 十二月廿三日

明治卅五年十二月十六日 主査 警務課長

大臣

警保局長

總務長官

臺灣課長

参事官

廳府縣ヘ通牒按（東京府ヲ除ク）

巡査看守退隱料及遺族扶助料法第三條第二項ノ解釈ニ関シ左記ノ通リ閣議決定相成候条自今右解釈ニ依リ裁定相成様致度依命

此段及通牒ス也

年月日

警保局長

台湾民政長官ヘ通牒按

（前全文）

臺湾謀長

内務省甲三六号 三十五年十二月十六日

内閣送第六〇號

巡査看守退隠料及遺族扶助料法第三條第二項ニ関シ左ノ通リ閣議決定相成ル旨此段及御通牒ス也

明治三十五年十二月十六日

内閣書記官長　柴田家門

内務總務長官山縣伊三郎殿

巡査看守退隠料及遺族扶助料法第三條第二項ノ一時金ニハ從前ノ法令ニ依レル諸種ノ退職一時金ヲモ總テ包含スルモノトス

内務省甲三六号 三十五年十二月十六日 第三二八号

乙

内務省 明治卅五年 四月卅日受決 陽甲第一八号 四月卅日文書課長 行 五月一日

明治卅五年四月十八日

主査 警務課長 臣

警保局長 案 奮

大臣

總務長官 嚴

參事官 野村 奮 (代) 塙内 金山

法制局長官、回答案

本月十六日付照第四五号ヲ以テ巡査看守退隠料及遺族扶助料法解釈ニ関スル當省ノ意見呈知被成度旨御照會有之候處當省ニ於テハ別紙ノ通解釈致居候此段及回答候也

内務省

(東福)

年月日

内務總務長官

宛

巡査看守退隠料及遺族扶助料法第三條第二項ノ一時金中ニハ從前ノ法令ニ依ル諸種ノ退職一時金ヲ包含スルモノトシ此等ノ一時金ヲ受ケタル者又ハ受クヘキ者本項ニ依リ退隠料ヲ受クヘキ場合ハ前ニ一時金ヲ受ケタル在職年數ヲ通算スルヲ至當トスルモ從前ノ法令ニ依リ數回一時金ヲ受ケタル者ニ在リテハ最終ニ一時金ヲ受ケタル在職年數ノミ通算スヘキモノトス何トナレハ從前ノ法令ニ於テハ總テ退職毎ニ打切リ支給ヲ行ヒ前後在職年數ノ通算ヲ認メス從テ從前ノ法令ニ依リ受ケタル一時金トハ最終ニ受ケタル一時金ノ外之ヲ認ムルヲ得サルモノトス新法ニ依ル

通算ノ効果ハ舊法令ニ於テ認メサリシモノニマテ遡ラシムルハ隱當ナラサレハナリ

内務省

72

内務省
明治五年四月十六日
第甲第一八号

(青吉)

照第四五號

巡査看守退隱料及遺族扶助料法解釈ニ関シ恩給局長ヨリ別紙ノ通提議有之候ニ付右ニ対スル貴省御意見承知致度此段及御照會候也

追テ別紙ハ御回答ノ節御返付相成度候

明治三十五年四月十六日

法制局長官　奥田義人

内務總務長官山縣伊三郎殿

内務省
明治五年四月十七日
第一〇三号

甲

内務省　第　年　月　日受　内務省　第　年　月　日文書課長

明治卅五年六月廿日　主査　警務課長（印）　行　年　月　日

大臣

警保局長

次官

巡査看守退隠料及遺族扶助料法

解釈ニ関スル件

巡査看守退隠料及遺族扶助料法第三條ノ解釈ニ付テハ曩ニ警視總監ノ問合ニ対シ経伺ノ上回答スルト共ニ廳府縣ニ対シテハ其旨通牒致置矣処其ノ後恩給局長ヨリ

内務省

嘉

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

仝上ノ件ニ関シ閣議申請ノ趣ヲ以テ法制局長官ヨリ本省ノ意見問合有之曩ニ決議ノ趣ヲ以テ及回答置美然ルニ其ノ後法制局ニ於テハ審議ノ末本省意見ト全ク反対ノ解釈ヲ執ルコトニ決定実ニ漏聞ケリ即チ本省ニ於テハ法第三條ニ所謂退隠料及一時金トハ独リ新法ニ依リ受ケタル退隠料及一時金ノミナラス巡査看守給助例及十五年太政官達第六十六号并ニ巡査満年賜金ト呈モ其ノ実質退隠料又ハ一時金ナルニ於テハ共ニ包含スルモノトノ解釈ヲ執リタルヲ以テ巡査看守給助例其他ノ規定ニ依リ年金又ハ一時金ヲ受ケタル者

再ヒ前職ニ就キ新法施行後ニ至リ退職シタルトキハ第三條ノ規定ヲ適用シ前後在職年数ヲ通算セラルヽコトヲ得ルモ法制局ニ於テハ新法第三條ノ退隠料及一時金ハ新法ニ依リ受ケタル退隠料及一時金ノミヲ指称スルモノニシテ巡査看守給助例其ノ他ノ規定ニ依リ受ケタル年金一時金ノ類ハ包含セストノ解釈ニ決定シタリト云フヲ以テ舊法令ニ依リ年金又ハ一時金ヲ受ケタルモノニシテ再職シタルモノハ今後退職スルモ前後在職年数ヲ通算セラルルコトヲ得ス

斯ノ如ク本省ノ解釈ト法制局ノ意見トハ

其結果非常ノ相違アリテ迂査者守ノ利害ニ関スル少ナカラス然ルニ此儀閣議ニ於テ法制局意見ノ通決定相成矣ニ於テハ本省ニ於テモ從来ノ解釈ヲ一変シ閣議ノ決定ニ依ラサルヲ得サルモ既ニ昨年八月以来本省ノ解釈ニ依リ年金又ハ一時金ヲ給與シタル実例多キニ拘ラス突然之ヲ改メ巡査ノ爲メ非常ノ不利益ナル解釈ヲ取ルハ一般ニ不安ノ念ヲ懐カシメ甚好マシカラサルノ結果ヲ見ルニ至ルヘキノミナラス當局者モ亦実際堪ヘ能ハサル処ト存矣就テハ現行法文果シテ本省意見ノ如ク解釈スル能ハストセハ法制局意見閣議ニ於テ決定前法律改正ノ外無之ト存矣法律按ハ追テ相伺フヘク矣得共先以テ本議御決定相成度此段相伺矣

恩給局意見

巡査看守退隠料及遺族扶助料法第三條第二項ノ一時金トハ此法律ニ依リ給與セラレタル一時金ハ勿論巡査看守給助例ニ依リ給與セラレタル退職一時金ヲモ包含ス故ニ例ヘハ明治二十年一月警視廳巡査ヲ拝命シ明治二十七年十二月退職ノ上七ヶ年分ノ一時金ヲ受ケ二十八年一月更ニ神奈川縣巡査トナリ三十三年十二月ニ至リ退職シ六ヶ年分ノ一時金ヲ受ケタル者三十四年一月千葉縣巡査ト爲リ仝年十二月ニ至リ退職（三十四年八月日ヨリ新法実施ス）シタルトキハ警視廳ニ於テ一時金ヲ受ケタル七年間ト神奈川縣ニ

於テ一時金ヲ受ケタル六ヶ年ト千葉縣ニ於テ在職シタル一年トヲ通算シ十四年間ニ対スル退隠料ヲ給スルヲ至當トス

巡査着守給助例ハ一旦退職シタルトキハ再ヒ職ニ就クモ前後在職年数ヲ通算セサルヲ原則トス故ニ右ノ例ニ依ルトキハ警視廳ノ七年ト神奈川縣ノ六年トヲ通算スルトキハ十三年トナルモ給助例ニ於テハ單ニ六年ニ対スル一時金ヲ共ヘ年金ヲ共ヘサリシナリ然ルニ新法施行後一ヶ年ニテ退職シタルカ爲メ曩ニ通算ノ恩典ニ浴スルコトヲ得サリシ總テノ在職年数ヲ通算シ十四年ニ対スル退隠料ヲ受クルヲ得トハ穩當ニアラス

法制局意見

巡査看守退隠料及遺族扶助料法第三條ニ所謂一時金トハ全法第二條ニ依リ給與セラレタル一時金ノミヲ指スモノニシテ明治十五年太政官達第五十一号巡査看守給助例ニ依リ受ケタル退職一時金ヲ包含スルモノニアラス故ニ新法施行前一時金ヲ受ケタル者ハ再ヒ巡査看守ノ職ニ就キ新法施行後ニ至リ第一條第一項各号ノ一ニ該當シ退職スルモ曩ニ前ニ一時金ヲ受ケタル在職年数ハ之ヲ通算スヘキモノニアラス

此ノ解釈ニ依ルトキハ巡査看守給助例

実施ノ當時在職十年未満ニテ退職シタルモノ再職シテ新法施行ノ後ニ至リ退職スルモ退隠料ヲ受クル上ニ於テハ即チ在職年数ヲ算出スル上ニ於テハ曩ノ奉職ハ全ク無効トナルニ至ル

内務省意見

巡査看守退隠料及遺族扶助料法第三條第二項ノ一時金トハ該法律ニ依リ給與セラレタル一時金ノミナラス巡査看守給助例ニ依リ受ケタル退職一時金及満年賜金等実質上一時金ハ總テ包含ストノ思給局意見ハ異議ナシ然レトモ巡査看守給助例ニ依リ若ハ巡査看守給助例及満年賜金規則等ニ依リ二回以上一時金ヲ受ケタル場合ニ於テ悉ク之ヲ通算シ退隠料ヲ給スルハ舊法ニ於テ認メサリシ在職年数ヲモ新法ハ遡テ之ヲ認ムルコトヽナリ穩當ノ解釈ニアラス故ニ此場合ニ於テハ最後ニ一時

金ヲ受ケタル在職年数ノミヲ通算スルヲ
至當ト認ム

一金五千二十六円六十銭
但シ巡査看守退隠料及遺族扶助料法
第三條第二項ノ解釈ヲ恩給局意見ニ
依ルトキハ給與金ニ於テ凡本行金額
ノ増加ヲ要ス尤前職二回以上ノモノ
ノ負数調査ヲ欠クヲ以テ假ニ總負十
分ノ二アルモノトシ算出ス

一金五十二十六円六十弐

但シ巡査看守退隠料及遺族扶助料法第三條第二項ノ餅紙ヲ擴張シ恩給局意見ノ如クスルトキハ給與金ニ於テ凡本行金額ノ増加ヲ要ス

内訳

金四千二百八十四円

一年内ニ於テ一時金ヲ受ケタルモノ五百九十二人其内十分ノ二ハ前職二回以上アルモノトシ一回ノ前職年数六年トシ前後通算ノ結果十年ノ退隠

料ヲ受クルモノトシ年金三十六円百十九円
人分
金六百五十五円二十銭
退隠料ヲ受ケタル四百五十五人ノ十
分ノ二ハ二回以上ノ前職アルモノト
看做シ此人員九十一人ニ十二円俸六
年分七円二十銭宛ヲ退隠料額ニ加給
スルモノトシ算出ス
金八十六円四十銭
遺族扶助料ヲ受ケタルモノ百八十一
人ノ十分ノ二ハ前職二回以上アルモ
ノトシ此人員三十六人ニ対シ六年分
退隠料加給額七円二十銭ノ三分ノ一
ヲ増給スルモノトシ算出ス